

「太平山麓九条の会」だより

事務局：須黒法律会計事務所
〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18 FAX0282-22-3757
電話連絡先 0282-22-7079(増田) Eメール oohirasanroku9jo@yahoo.co.jp



223号
2026年4月24日発行



「戦争反対！ 憲法を守れ！」の声を 「憲法記念日」スタンディング



5月3日(祝日) 10時～11時 イオン・カワチ薬品前交差点

高市首相（党総裁）は、自民党の定期党大会で憲法改正について「立党から70年、時は来た。『改正の発議にめどが立った』と言える状態で来年の党大会を迎えたい」と述べ、今後一年で国会発議に道筋をつける考えを表明しました。

戦争国家づくりの中で9条改憲への動きが強まっています。戦争の道を止め、二度と戦争しないと誓った憲法9条を守り生かすために、79年目の憲法記念日スタンディング、「戦争反対！ 憲法を守れ！」の声をあげましょう。 共同主催「栃木市民の会」「とちぎ市民ネット」

「憲法9条改悪に反対する請願署名」のご協力を！



署名のお願いについて

「太平山麓九条の会」は、改憲の危機が強まっている状況のなか、「九条の会」の呼びかけに呼応し「憲法9条改悪に反対する請願署名」に取り組むことにしました。

- ・「請願署名」用紙は、9条の会のニュースと一緒にお届けします。
- ・ご協力いただきました署名は、スタッフまたは「太平山麓九条の会」宛の封筒に、大変申し訳ありませんが切手を貼って投函くださいますよう、ご協力お願いいたします。

請願署名の要旨

「唯一の戦争被爆国」である日本は、すべての戦争がなくなるように、世界に対して率先して働きかけるべきです。しかしいま、政府からは核武装を唱える声が聞こえ、国会では、憲法を変えるための条文起草委員会を憲法審査会に設置する動きが始まっています。

私たちは、戦争につながる憲法9条への自衛隊明記、そして政府に権力を集中させて、人権保障と権力の分立を停止させる緊急事態条項の導入に反対して以下の項目を要求します。

請願事項

1. 戦争準備の憲法9条改悪と、緊急事態条項を導入する改憲をやめること
2. 衆参の憲法審査会に改憲案の起草委員会を設置しないこと



スタンディングのご案内

5月 9日(土) 市役所前 19日(火) ケーズデンキ大平店前交差点 午後4時～30分間

戦争の時代を生きた「証」

～平和を願って歩み続けて～

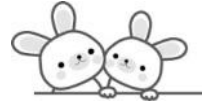
増田 千代子（記）

寄稿いただきました増田千代子さん（宮城県名取市在住）は、現在94歳です。

「宮城九条の会」で長年、憲法9条を守る活動をされている中で、宮城県の退職女性教職員の一人として、「おばあさんから孫たちへーみやぎの戦争ー」を2005年に出版しました。県内に住む戦争体験者の話を聞き書きしてまとめたものです。現在も、仲間による語り部活動は続いています。

今回、娘さんである小林淳子さん（栃木市在住）を通して、戦争の時代を生きた証、そして、平和を願って生き続けてこられた思いを寄せていただく機会に恵まれました。

今月号が初めての掲載ですが、今後、数か月に渡ってご紹介させていただきます。



仙台近郊の『杜の倶楽部』という介護施設で暮らし始めて早一か月。近くに病院もあり、若い医師、看護師、介護人などに囲まれ、「三食昼寝付き、有難いね」と冗談を言いながら、今まで経験したことのない病後の生活をしている。こんな病人に原稿の依頼が来た。一度は辞退したのだが、終戦から昨年で80年経過。13歳、4月に女学校に入り、去年で93歳を迎えたことは誠に感無量であるし、あの戦争が始まってから多感な少女時代と一緒に過ごした仲間も次々と世を去り、残されている今、実際に見聞したことを記録として書き残しておこうと決意し、依頼を受けることにした。

【終戦の日】

1945年8月15日、満州の吉林高等女学生だった私は、皆と共に炎天下の校庭に集められ、何が起こったのか分からないまま、ラジオから流れる天皇陛下のお言葉を聞いた。近くにいた担任が「戦争が終わった。つまり敗戦宣言だな」と悲痛な面持ちで教えてくれたのを今でも鮮明に覚えている。上級生達のすすり泣きが次第に高まっていった。

家路につくと、いつも仲良くしていた中国人（満人）達が、私たちに物を投げつけたり、通せんぼの意地悪をしてきた。偶然、私宅のペチカを焚く男が通りかかり「女学生に手を出すな、彼女たちが悪いのではない。」



と言って、私たちをかばってくれて助かった。

一級上に作家の澤地久枝さんがいて、その方と中国語で話していたので、後で聞いたら「そうだよ。日満仲良く暮らしていたよ。ありがとう。国民が悪いのではないよ。謝々（シェイシェイ）」と言ったそうだ。

【混乱の中での生活】

それからの生活は一変した。中国人に対して差別的な態度をとっていた人々は、ひどい目に遭わされ、あちこちで暴動も起きていたようだ。我が家はお寺（日満寺）だったので中国人の出入りも多く、その年は大きな問題もなく過ごすことができた。父が学費などを援助していた子供の親達からも食べ物を差し入れてもらい、助けられていた。

そんな中、向かいの白菊寮というアパートがソビエト人の宿舎にするから明け渡せ、という命令が出て、そこに住んでいた人々の荷物が我が家の庭に運びこまれたのを機に、多くの満人達が集まりだし、騒ぎが始まった。我が家も狙われ、警備隊がかけつけてくれたが、略奪が始まってしまった。父はこれを予期していたのか、日本人の将校達が住む「軍事部住宅」の小岳さんに渡りをつけ、最小限の荷物を密かに運び入れており、母と子供たちも避難させてくれたので、命は守られた。数時間後、家に戻ると、家の枠だけが残り、佛具もすべてなくなっていた。

次月号へ続く